北海道における縄文世界遺産の拠点形成に関する懇談会（第３回）議事概要

１　日　時　令和６年10月17日（木）14：00～16：00

２　場　所　TKP札幌ビジネスセンター赤れんが前　カンファレンスルーム５Ｉ

３　出席者

〈有識者〉　木野委員、小林委員、田代委員、永原委員、西山委員、水口委員

〈事務局〉　黒須文化局長、栗原縄文世界遺産推進室長、阿部特別研究員

4　概　要

（1）永原委員による報告

【永原委員】

弊社は旅をデザインする会社。特に自然遺産・文化遺産を保全、活用しながら、唯一無二の体験やストーリーを軸にした旅を作ることに努めている。旅行者の知的好奇心が満たす旅を提供できればと思い、欧米を主とした富裕層に向けた旅を作っている。

本日は弊社が作った縄文の旅を紹介する。弊社の根底にあるのは経済循環型観光。地域のパートナーと、経済が循環するようにしながら、精神的に向上できる旅を作ることに努めている。

これは文化庁の文化資源の高付加価値化促進事業[1]で作った、函館市縄文文化交流センターを中心とした南茅部エリアにフォーカスした縄文の旅。テーマは道南地域の1万年を辿る歴史文化観光プログラム。ハイライトが3点。①縄文というストーリーにより、バラバラだった魅力的な地域の観光資源、食やアドベンチャー体験、縄文の遺跡や博物館、全てを繋いで、価値の高いものに向上させたこと。②ひとつの参考値でしかないが高価格帯の旅の実現したこと。1人あたり 30 万円ほどの旅を販売することに成功した。③専門家である縄文文化交流センター元館長の阿部先生がいたのは大きく、観光の収益が最終的には地域の文化財を保全する原資になるという考え方の下で協働した。

現代の私たちはストレスとどう向き合うかってことで、様々なライフスタイルが提案されているが、縄文文化から学べることが今の私たちを助ける道標になるのではないかと思っており、そういった気づきの旅を提供したいと思って提案している。

こちらは実際の国内旅行会社の旅。9日間のうちの3日間が、函館エリア。縄文文化ばかりを体験するような旅ではなく、乗馬、五稜郭、その他の魅力も提供している。

縄文の旅のローンチイベントを東京でやった。縄文文化に影響を受けたアーティスト等が縄文をキーワードに集まり、メディア向けにディナーを開催した。知的好奇心を満たしていただくために修学旅行で学ぶような内容もおしゃれな空間でお伝えし、皆さん感心して話を聞いた。いるば 28[2]の作品も展示させていただいた。食事もシェフが縄文時代に食べられていた食材を東京大学の先生のところで研究し、メニューを構成した。

前回、縄文は禅と戦える概念ではという話があった。なぜ禅が世界的に受け入れられたかをまとめた。禅は仏教の一部として受け入れられたわけではない。宗教や文化の壁を越えた普遍性があるからこそ、受け入れられた。その点で、縄文と似ている。

---

[1] https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/bunkakanko/pdf/93695702_01.pdf

[2] https://iruba28.localinfo.jp/　札幌にある障がい者就労支援事業所。土偶などをモチーフにした作品を制作・販売している。

最後に南茅部が拠点として望ましい理由を挙げる。山から海の自然の融合があって、アクティビティをしても、川を下る際に縄文人の生活を感じられるなど、縄文ストーリーを伝えていくのに非常に適している。しかし、課題も多い。宿が圧倒的に不足。これから多くの宿ができると思うが、宿は一番大切な要素。あとは二次交通の欠如。特にインバウンドのお客様は公共交通機関で移動することが難しいので、かなり大きな課題。また、ガイドの不足。阿部先生のような方がいない時に代替が効かない。こういった人材育成の仕組みづくりが必要。

【小林委員】

小規模でクオリティが極めて高いホテルのグローバル・ネットワーク（プライベートジェットの私用空港が近傍にあるなど）と結びつけると、世界的な価値が高まる可能性が高い南茅部であり、ツーリズム・シナリオの内容で、全然違うハイエンドな層が繋がる。

【永原委員】

おっしゃる通り。弊社はそういう層のお客様が半分ぐらい、残りが通常の旅行会社のファーストクラスやビジネスクラスで旅行されるような方。プライベートジェットで訪日する方々が滞在できる宿に限りがあり、もったいない。そういったお客様と通常の富裕層では、準備が全然違う。縄文の旅は日本人にも売れると思っているので、幅広く、超ハイエンドとハイエンドと一般の方。あらゆる層に向けた発信と、環境を整備が必要。

【水口委員】

誘客機能の議論では、地元との繋がりをどうするのかが一番大事。永原さんが 1 件 1 件連絡して旅程を組むことは難しい。地元の誰かが永原さんと相談して旅程を作り、永原さんは世界的なラグジュアリーの旅行博でその情報を出して、お客様を捕まえてくる構造になっている。

アドベンチャートラベルはラグジュアリーとは分野は違うが、構造は似ている。地元がトラベルデザイナーとの繋がりを作り､カンファレンス等に出て縄文を売っていく形になると思う。

（2）木野委員による報告

【木野委員】

拠点の形成にあたって、改めて南茅部を推したい。今回の発表では南茅部の現状や魅力、地元の活動を紹介したい。また、現地における実践的なプロジェクトが生み出す可能性などを示したい。

拠点形成の方向性として、①「縄文の世界観を多面的に深掘りした新しい見せ方、地域の風土資源を素材とした創造活動。その両輪を世界中、日本中の多様な人々の、興味関心、心と体に響かせること」。やや抽象的な言い回しだが。②「南茅部のコアな拠点、地域全体＝サテライトが、多様な創造・研究・挑戦を牽引し、協働を後押しし、その創造性・魅力を世界へ発信し続ける」が僕の中で大事だと思うコアなイメージ。

南茅部を拠点にしたアクションについての僕の視点。①地域にある様々なその資源の掘り起こしと魅力化、②地域との協働、③その継続的なプロジェクトの展開と発信。縄文とそれ以外の潜在する地域の文化資源に深く向き合うことで、多種多様な協働のプロジェクトが生まれてくことが望ましいのではと感じている。

観光戦略の視点は、①『訪れる目的・期待感を増やす』『縄文＋以外』滞在体験メニューの造成。縄文・歴史に関心ない人にも、滞在体験の満足度を与えたい。②『自然、アート、食、アクティビティ、住民との交流』を通じた『異文化体験』の提供。縄文の精神世界に触れ、旬を

食し、体動かし、人と交流し、学び、異文化を五感で楽しむ。③『全域を滞在体験の舞台』とし、南茅部『ならでは』やユニークベニューを活かした周遊。1箇所に留まることなく、土地巡りの中でさまざまな体験が得られる。有形無形に在る「地域ならでは」の掘り起こしと、幅広い創造的活用っていう視点。アートプロジェクトや縄文の世界観の役割は、本能、身体、直感に働きかけていくこと。また、禅の話に繋がりますが、心の内側に響いてくような問い、気づき、学び、見つめ直し、考え直し、再発見。心身、脳内、固定概念がアップデートされていくような感覚が得られる旅、滞在体験が作れると思う。

南茅部でのプロジェクトが生む有効性を4つ挙げる。①潜在する資源の掘り起こし、創造と学び、地域の賑わいへ展開。②新しい繋がり・関わり、共異体との多様な協働を生み続けられること。③次の1万年に向かう新しいストーリー・伝統をつくり始めること。④地域住民の主体性を育み、土地の誇りと・郷土愛を醸成していくことができる。

このような活動がもたらす効果、将来性、可能性は大きい。仮として有効的な実践プランとしては、各種多分野のアートプロジェクト、昆布・食の国際的アクション、アーティストが学校に滞在する「転校生はアーティスト」、地域住民の声を拾い集める継続的な聞き書き、世界中の学生を呼び込む滞在型スタディツアー、地域の福祉教育の振興、心の内側に響くような散策路「マインドトレイル」の造成、空き家・店舗・公共施設を利活用した拠点づくりなど様々。また、海産物が主軸産業でありながら地元の魚を地元で買えないと聞いており、例えば朝市や夕市~~とか~~を定期開催化したらどうかなど。縄文や地域資源をモチーフにしたアニメーション制作~~と~~、土地の記憶をテーマにした歩き巡る屋外写真展、独自のラジオ番組の配信とか。

地域特有の霧がかった気象「ジリ」さえ活かせるんじゃないだろうか。そういう幅広い視点で地域と向き合えたらいい。

【小林委員】

永原さん、木野さんの話、共感することが非常に多い。観光もイベント等々も、国内外から人が来てお金を落とす。しかし、そのお金が、消費、生産や雇用の地域地産率が低く、地域の外に出てしまう。入ってきたお金を地元で経済的に好循環させる仕組みが重要である。

【木野委員】

拠点に必要な機能は多くあり、ただ単に鑑賞する、見せる、モノを売るではなく、例えばチャレンジショップ。週末だけ誰もが出店できるような機能を持つとか。函館市街地側にいる多様で面白い活動をしているアンテナの高い文化人やプレーヤーと、南茅部や東部地域が接続していくようなハブになっていくことも求められるのでは。

函館市には大学が4つ。学生たちが東部エリアへ関心興味を持って、南茅部って面白いよね、函館には欠かせないよね、というような新しい関心を喚起するが拠点の存在のあり方であり、旗の掲げ方。様々な分野の人たちにとってのスタートアップや、チャレンジできるような、人と人が常につながれる場、未知の関心を掻き立てられる場、ここでは何かやってもいいんだよ。拠点にはそういう余白やオルタナティブな機能はあるべき。

【永原委員】

いかに地域に還元していくかという仕組みは、国レベルで議論をされ始めている。様々な関係者を巻き込み、行政マターとして進めるほうがいい。税に近い扱いをするのがひとつの方法。

函館市縄文文化交流センターを貸し切りたかったが、条例で入場料が300円と決まっていたり、貸切料金の定めがなかったり。寄付で還元しようと考えたが、お金を入れる先や取り扱い

の問題があり、循環させたくてもできかった。この部分は、法整備の問題も根深く、ダブルプライシングなどの議論がされているところ。私たちが単体の旅行会社としてやっていることは、寄付の提案。しかし、圧倒的に不十分で、かつその寄付した先の使途が決まっていないと、あまり意味がない。ここは別途話し合っていかなければいけない大きな問題。

【木野委員】

十日町市で長く続く越後妻有の大地の芸術祭。官民一体でやっていて、行政側は事務局、企画運営の現場は NPO。その NPO は女子サッカーチームＦＣ越後妻有を持っており、その選手たちが地域の農家さんの水田で田植えし、収穫して。サッカーと田んぼ、あと芸術祭が始まったら受け付けや来場者アテンド業務とかもやっていてめちゃくちゃハッピーな姿を視察研修で見てきた。

観光のことを質問した時、これまでは外部の色々な旅行代理店にたくさんお金を払って、ツアーを組んでもらっていた。そのケースで 10 年以上やってきたが、ここ数年は芸術祭を運営する NPO スタッフ自らが旅行商品を扱える資格免許を取ることで、旅行代理店とある程度同じ立場に立って発言できるようになった。自分たちが動かせる商品と視野が広がりコントロールができ、地元にお金を落としていく仕組みをツアーの中で組むことをより明確に実現できるようなった、っていう話を研修で聞いた。

【田代委員】

木野委員が発表した地元の人たちの活動が、うまく絡み合っていけば、南茅部の特徴が、ツアーでも、還元されるだろうなと。宿泊はすごく難しい問題だな、と思った。永原委員の商品は、国の重要文化財太刀川家 住宅店舗の隣の洋館 1 棟貸しや、橋谷株式会社がやっている温泉付き 1 棟貸しなどにシェフを呼び、地元の食材を作るとか、そういうやり方もあるのではないかと思った。

そこで気になったのが、木野委員と永原委員がいった縄文世界観。どういう意味で使われているのかに興味がある。

【永原委員】

精神的なもの。なので、禅に近い。先ほど紹介したように、人生に迷った時の、大きな意味での道標になるようなもの。縄文の世界観を知ることで、個々の方々が答えを見つけていくもの。なので、あなたにはこれっていう答えがなくていいと思っている。

【木野委員】

教科書的に学べるような縄文もあれば、心の内側に響いてくような縄文もあると思うが、そういったものも含めて世界観という言い方をした。縄文を新しい観点、手法、とらえ方で、いろんな見せ方、アピールの幅を持たせていったらいいと思っている。旅の途中でフラっと訪れた人や、歴史や縄文に全く関心がない方、もしくは縄文とか考古学が好きな方、そういった方たちの誰もが画一化された同じものを見て、同じ体験をして帰っていくようなメニューとは違う新たな体験のあり方、地域の楽しみ方の提供が必要であり、より関心を持った人たちに対しては深掘りし続けられるレイヤーの階層を用意できたらいいのでは、と思う。

【永原委員】

大前提として、旅を作るにあたって、すべてを論理一貫させる必要はないと思っている。旅の中でのいくつかのポイントで、縄文文化に学ぶ機会があれば、十分。例えば、日本酒のツアーを作るときに、毎日ひたすら酒蔵行ったり、田んぼいったり、飽き飽きしてしまう。それと

同じで、すべてを縄文色に染める必要はない。しかし、縄文っていうキーワードに差し掛かった時には深い体験を提供したい。それを提供するに不可欠なものが函館市縄文文化交流センター。私たちの場合は、発掘作業から展示まで、すべて関わっていた先生がいて、そこの裏側のストーリーを話していただける、そこに他にはない価値があると思っている。そういったストーリーをきちんと提供できる場所とストーリーテラーがいるところが大切。

【田代委員】

観光であったり、様々な地元の人たちとの関わりや一般の社会との関わりで過去は変わるので、南茅部の拠点のあり方は世界遺産になった縄文の価値をぶれずに伝える機能が出てくる。そこでの専門家のあり方は、阿部さんが分身するってやり方よりは、様々な専門の専門家がいて、その人達の良さを活かしながら、観光や地元の人たちと連携していくのが、いいやり方。考古学者を中心に、何かを期待され過ぎても困るというのが私の意見。専門家は重要だが、連携の仕方は拠点中心に考えていただければと思った。

【水口委員】

専門家が話をしてくれるのは素晴らしいことだが、相手のお客様による。一般的な観光客であればガイドで十分対応できるが、ガイドの質が問題。海外ではガイドは誇りを持ち、ストーリーテリング練習している。専門家はそんなに大勢いないし、いないからこそ貴重。ガイドの育成も拠点機能のうち。

【西山委員】

私昆布の話大好きで、小さく縄文時代からと紹介されていたが、本当に言えるのであれば、素晴らしい。多少こじつけであっても、人が「なるほど」と思うようなことが大事。学者は学術的がそこまで説明できないという話になるが、どこまで学術的に、どこから一定の飛躍をもってやるのかを線引きする必要がある。

禅の話は、縄文が禅に似ているというよりは、禅に代表される日本とか東洋の考え方の基層にある。禅を知りたいなら縄文を知れみたいな関係性で、アピールしていければと思う。

また、専門家、阿部先生がフィーチャーされているが、経験やハートのある学者が関わってくれれば、こんな幸せなことはないが、実際には難しい。エコミュージアムのコアミュージアムの考え方は、必ず学芸機能を持つこと。システムとして、興味を持った人、より深い興味を持った人にも応えていけるようにする。普通のお客さんは普通のガイドさんをお願いしてまわる。ガイドさんが困るような質問がある人には、コアミュージアムの学芸員カウンターで学芸員が答える。または、ちょっと時間置いて、学芸員がきちっと調べて答える。エコミュージアムは、観光システムではなくて博物館システム。だから私はこの文化局が担当している拠点はその辺の話が大事なんじゃないかと思っている。

もう１点は、仮に南茅部と想定した時、本来であればコアミュージアムは最寄りの新幹線駅や函館空港、そういうところにあったほうがいい。そうでなければ、そういうところに情報センターだけ置き、学芸機能は南茅部に置くというような連携する形。今の時代は色々なネットワークを使ってもできるので、学芸機能と縄文を知りたいという様々なニーズをどう繋いでいくかっていうようなシステムをどう作ることが重要。

もうひとつは赤れんが。個々の世界遺産の説明コーナーもあるので、本庁にしっかりとした学芸機能を置き、そこをどうリンクさせて、全体システムとしてどうやっていくのか、役割分担をどうするのか。そして、個々の構成資産にはサテライト博物館のような史跡のガイダンス

施設がすでにあるが、これとどう連携していくか。それぞれのサテライトにいる、個性を持った学芸員を生かすシステムを真剣に考える。こんなことが、この懇談会として議論を深めて、可能性も考えた上で、成果して出すべきではないかなというふうに、思っている。

【小林委員】

拠点機能を本庁にという話があったが、場所として本庁はあるだろう。しかし、行政組織や行政人材は永続的ではないので、拠点の運営・経営は外部組織にした方が良い。行政組織を時に併せて進化させることが行政トップの役割でもあり、拠点機能を札幌に置くにしても、拠点機能の運営や経営を行政組織と結びつけないほうがいいと思う。

【西山委員】

まさにそういう話をすべきじゃないかと思う。萩のまちじゅう博物館ってエコミュージアムは、NPO 萩まちじゅう博物館を設立と同時に立ち上げ、市民学芸員を一生懸命育てている。学芸員は市職員だが、NPO と同じ萩市の博物館の中に事務局を構え、学芸員の専門性をどんどん市民の方に広げていく。そこでガイドのあり方も考えているし、サテライトがどうあるべきかを考えるようなことをやっている。

もし北海道のようなレベルであれば、財団のようなものをきちっと外に立ち上げて、それがDMO のような機能を持つべき。DMO っていうのは地域への還元の話も考える組織。

（3）拠点形成方針議論

【事務局】

（資料 1 により説明）

【小林委員】

国交省や旧文部省が目標や事業を考えるとき、今後の人口減と税収減を念頭に置いた将来予算の見通しを意識している。今後は、公民連携を考えていかないと、保たないというのが、現場の意見。拠点機能を整備、維持していくとき、道の予算が減ることを前提にして、20 年 30 年維持していくかも併せて考えていく必要がある。世界、そして日本の優良な民間企業や投資家との公民連携を考えながら拠点の整備することも、頭の片隅に置いておく必要がある。

【進行】

素案が案に向けて大きく変わるものではないと考えているが、それぞれの取り組みなどの中に、もう少し厚みを出した方針案の検討を考えている。一方で、その整備の手法や運営の方法は、これまでの拠点機能のあり方確認を策定したものがあり、その中では民間の活用の議論をされている。そういったことも踏まえながら、今後検討していきたいとは思っている。

【水口委員】

民間の力を入れてやっていった方が絶対いい。その時に、南茅部では、本日の永原さんの発表にようにいろんな実績があり、際立っているところがある。南茅部の拠点は、どんどんその成功例を作り、他のエリアに伝播していくとか、そういったことが現実的には早いとイメージしている。

【小林委員】

今まで、霞ヶ関（ハブ）が決めた基本的な方針を基にして、各都道府県市町村に展開していくような、ひとつのルールで全部やろうとしてきた。しかし、市町村の理由事由によってローカルハブっていう考え方が生まれてきた。拠点機能は道央圏におく、でも、ローカルハブはた

くさんあるという前提で考えると、道南のほかに、道北や道東の可能性もある。ハブとローカルハブ、その事由によってローカルハブの内容、特徴は変化して構わない。
【西山委員】
　何よりも重要なのは継続して、高い目的意識を維持していきながら運営していく組織体はどうあるべきかという話。10 年前と全く今状況違う。とてもではないが官が丸抱えやるような、指定管理とか、ナンセンスなこと言ってる場合じゃない。あえてここで組織形態までは言わないが、どういう組織形態であるべきか、そこでニーズを述べるのが、道だけではないと思う。そういうものをある程度、キックオフを議論するのがこの場であったと思う。是非とも、本当に持続可能な運営執行の仕組みを作るにはどうしたらいいのかということを議論して欲しいということを議事録に残して欲しい。
【進行】
　各委員の皆様からいただいた意見は議事録に残させていただいております。次回は西山先生に萩市でのエコミュージアムの取り組みを海外移転している事例をご報告いただきたい。